一般社団法人 日本LD学会第32回大会（広島）論文集（2023.10.8-9）

ポスター発表
義務教育期（小・中学）の支援１

[P06-6]
LD児と教員の関係性の変化から生まれた学校における主体的なICT活用
LDのある中学生がiPadでの学び方を教員とともに考えるまでの約１年半の経過分析

○内田 佳那[1, 2]、丹治 敬之[3]
（1. 兵庫教育大学大学院連合学校、2. 日本学術振興会、3. 岡山大学学術研究院教育学域）

Ⅰ．目的

GIGAスクール構想の開始から約２年が経過したが、学校におけるLD児へのICT活用や合理的配慮は未だ十分ではない現状がある。特に、中学校では教科担任制となり、教員間で支援方法の共通理解が得られにくいことや、テストや入試での公平性の懸念等から、個に応じた学び方が認められにくい場合がある。一方で、中学生になると、学習内容の複雑化、テストの点数や順位の開示等により、LD児の学習意欲や自尊感情が低下しやすくなることも少なくない（福井県特別支援教育センター，2018）。本研究では、中学校１年生のLD児におけるiPadを用いた宿題提出の変更から、主体的なICT活用と教員との関係性の変化から生まれた学習意欲の変容、そして本人が教科担当の教員にiPadの活用法を相談し、学校で自分自身の学び方を教員とともに考えるまでの約１年半の経過を報告する。

Ⅱ．方法と結果

1．参加児： 特別支援学級在籍の中学１年生のLD児１名（A児）であった。漢字や英単語の習得困難、小さなマスに文字を整えて書くことの難しさ等がみられた。研究開始時、A児が最も何とかしたいと感じていた課題は、新聞のコラムを作文用紙に書き写す宿題であり、A児から「とにかく時間がかかる」「疲れる」等の訴えがあった。本研究ではA児の書字負担を軽減するための手段の１つとして、iPadでの学習方法を導入した。

2．支援の経過：iPadの導入から、A児と中学校教員が対話をし、共にiPadの活用法を考えていくまでの約１年半の経過をまとめた。

1）学び方の模索【中１後半】：大学の教育相談で、ノートの罫線の幅やマスの有無、手書き、キーボード入力、タブレットペンの使用により、書きやすさや疲労感が変化するかをA児が評価した。マスが小さくなるほど手に力が入って疲れる、キーボードは入力や変換に時間を要する等が分かり、iPadにタブレットペンシルで書く方法が、A児の疲労感を最も軽減させる方法であることが分かった。A児からは「タブレットペンは手を使わない感覚」、「簡単に消せて、跡が残らないのが良い」、「鉛筆と消しゴムだと、せっかく書いたのにメンタルが潰れる」等の発言があった。

2）ケース会議での発表【中１後半】：A児と筆者で、前述した書字方法の比較結果をプレゼンテーションソフトでまとめ、A児が教員に向けて発表した。ケース会議ではA児が実際にiPadの操作方法を見せる場面もあり、教員からは「鉛筆で書いているのと同じだね」等の反応があった。以後、国語の一部の宿題でiPadを使用することになった。

3）学習意欲の低下【中２前半】：家庭では英単語アプリ等を活用し、英検にも合格したA児であったが、学校のiPad活用は思うように進まず、テストの低成績が続き、学習意欲が低下していた。特に英語は、頑張りたい思いはあるものの、学校の小テスト（日本語からスペルを書く）や宿題（英単語を何度も書いて覚える）では力を発揮できないこと、先生に努力を認めてもらえないことに悩んでいた。それらについて、大学とA児の担当教員でケース会議を開いた際には、教員からiPadの学習が入試やテストで実力を発揮できる学習になるか、評価の公平性が担保できるかについて懸念の声が

©一般社団法人 日本LD学会

あった。しかし、A児の学習意欲や自信の向上が重要課題であることを共有し、その問題解決に向けたiPadの活用に関する合理的配慮を共に考えることとなった。その結果、学校へのiPadの持ち込み、英単語学習アプリによる宿題、アプリの出題形式に合わせた選択肢付きの小テストへの変更が導入された。

4）教員との関係性の変化【中2後半】：英語でのiPadでの学習方法の導入以降、A児はアプリでの学習を担当教員が確認しやすいように、学習記録表を誰に言われることなく自分で作成して提出したり、学校のノート等を電子データ化することを教員に提案したりする等、徐々にiPadでの学び方を自ら教員に相談するようになった。また、教員もどのような小テストの形式が解きやすいのかをA児に尋ねたり、iPadでの学習や英語に向き合う姿勢を「主体的に取り組む態度」として評価したりするようになった。

3．倫理的配慮：本研究は、岡山大学倫理委員会による承認を得て実施した。個人情報の取扱、研究成果の公表等について保護者から文書による同意を得た。利益相反関係はない。

Ⅲ．考察

本研究では、書く宿題に課題意識のあるLD児が、筆者と共にiPadでの学び方を模索する段階から、中学校教員へ自ら相談し、教員と共に自分自身の学び方を考えていくまでの約1年半の経過を報告した。iPadの導入によってタブレットペンや学習アプリの有効性を早期に実感することができていた一方で、学校でのiPad活用は思うように進まず、学習意欲が低下し、自信を失っている様子が見られた。本事例のように、日々の大半を学校で過ごす子どもたちにとって、「学校での学び」が学習意欲や自尊感情に大きく影響すると考えられ、学校におけるICT活用や個に応じた学びをどう保障していくかが重要となるだろう。

本研究では、教員が本人の学習に対する意欲や自信を第一に考え、学校でのICT活用を進めたことで、iPadの活用法を自ら教員に相談する等、主体的に自分の学び方を考えていく姿が見られるようになった。さらに、そうした姿は、教員のA児に対する関わり方をも変容させ、学校全体で本人とともに学びやすい方法を模索するようになった。本研究は、学校でのICT活用や合理的配慮を効果的に進めていくためには、機器の導入、本人のICTスキルだけでは不十分であった事例を紹介した。そのためには、ICTでの学び方を認め、個に応じた学び方を相談できる教員の存在が重要であることが示唆された。最後に、本事例から、LD児本人の主体的なICT活用、それを支える人の存在は、「自分が学びやすい方法を考える」という学びに向かう力を変容させうると考えられた。

付記　日本LD学会上野一彦基金若手研究奨励プロジェクト、JSPS科研費23KJ1576の助成を受けた。

©一般社団法人 日本LD学会